
Fate/resistance

弓塚 拓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e／r e s i s t a n c e

【Nコード】

N 8 9 1 3 Y

【作者名】

弓塚 拓

【あらすじ】

杉内彩奈は異世界に迷い込み、理不尽なゲームに巻き込まれる！

注

F a t eの二次創作ですが、ストーリーや世界観が完全に崩壊しています。嫌な方はご注意ください。

プロローグ

熱帯夜、私は目覚めた。

全身が汗で濡れている。

いつの間にかエアコンが切れていた。リモコンを探しだしエアコンをつける。

不愉快な服を脱ぎ捨て、下着になりシャワーを浴びに風呂場へ向かう。

女はボディーラインが綺麗だった。顔も整っていて、長い黒髪はすごく魅力的だ。

女は脱衣室で下着を脱ぎ風呂場へ。

女はシャワーの温度を少し下げ、ぬるま湯を頭から浴びた。

シャワーの音が音の無かった部屋に鳴り響く。頭と体を洗い終わると女はシャワーを止めた。

濡れたまま脱衣室に入り、かけてあったバスタオルをとり、体と頭をふく。

女からシャンプーのいい香りが漂っている。

ふき終わったバスタオルを洗濯機の中に入れ、脱衣室を出た。部屋はエアコンが効いて涼しかった。さっき脱ぎ捨てた服やビールの缶などで散らかっていたが、部屋は高級感を漂わせている。絨毯、絵画、ベッド、どれも高そうだ。

時計は三時丁度を指していた。

女は、ベッドに潜りこみ眠りについた。

ここはどこだろう。

杉内彩奈は気がつくと思知らぬ所で寝ていた。

" 廃虚 "

全面コンクリートで出来ている建物だ。人が住んでいる雰囲気がない。がらんどろ。

彩奈は起き上がり背中と尻を手ではらう。

自分は部屋で寝ていたはずだ。なぜここにいるのだろう。記憶を遡ってみるがなぜだかわからない。それに、服を着ている。自分の記憶の最後は裸であつたはず。黒いミニスカートに黒い服を着ている。私物ではない。

何が起きた？

何かの力を感じた。とてつもない大きなものを。

私はその力に吸い寄せられたのだ。なぜだかそう思った。

これからどうしよう？ 彩奈は辺りを見渡した。とりあえずここから出よう。

暗く薄気味悪いここから早く出たかった。

部屋を出ると階段がそこにあつた。コンクリートの階段はいびつに感じる。まがまがしいものがこの先にいるような妄想を掻き立てた。階段を降りていくと自分の足音が木霊する。

後ろから何かの気配がした。振り向くが誰も居ない。前に向き直り足を進める。

しばらく降りると出口が見えた。

何故だろう嫌な予感がする。

出口の前で予感が当たっていたことを知った。ここから見える全ての建物が廃虚だった。

全て古びた、全て人を感じない、見える全てが廃虚だ――

鈍色の雲に埋め尽くされた空がより一層、不気味さを増していた。

何だ、この世界は。

ここは私が住んでいた世界ではない。

彩奈の額に汗が浮かぶ。夢だろうか？ いや、夢にしてはリアルだ。焦りが出てきた。恐い。得体の知れない世界、もとの世界には戻れるのだろうか？

喉の乾きを感じた。

なぜ？　なぜ私が：

自分に振りかかっている出来事が怖くて堪らない。

彩奈は地面に座り込み震えた。

イヤだイヤだ――

頭を抱えてひたすら何かからの恐怖に堪えていた。これが夢である事を願った。恐怖の中にいるのはとても疲れることだった。

彩奈は一時間後には疲れはて眠りについた。

目を開けるとまだ空は鈍色だった。

今は何時だろう。癖で腕を見るが、腕時計は無かった。どれくらい寝たのかもわからない。

彩奈は立ち上がった。

腹がすいていて、何か口に入れたかった。

自然と恐怖は消えていた。慣れたのだろうか？　それとも、この世界の力の影響だろうか。

しばらく彩奈は歩き回った。誰かに会えるかもしれないという気持ちを持っているのだが、今のところは人を見ていない。歩き疲れると、廃虚の一つに入ってしまった。

どれくらいの距離を歩いたのだろうか。彩奈は地べたに座った。部屋には家具などが無かった。腹がなり始める。この世界には食料は無いのだろうか？

何もする事が無く、もと居た世界に思いを馳せた。

何故だろう、思い出せない。最後の場面は覚えているのに、どうしてもその後が思い出すことができない。

家族、友人、住所、全てが思い出せない。

ここにきて初めて涙がこぼれた。ショックな出来事が多すぎる。我慢がでなくなっていた。早く帰りたい。

しかし、もとの世界の記憶がない。帰れたら記憶は戻ってくるのだろうか、それとも、

先は考えたくなかった。何も考えたくない。
腹が鳴る。

とりあえずは、食べ物を探そう。

この先を考えることを止めたかった。

廃虚は五階建てだった。部屋の数は全部で十五部屋、その内一階にキッチンがあった。

冷蔵庫の中を探ってみる。すると、食材が沢山あった。魚、野菜、冷凍食品、調味料、一般家庭の冷蔵庫の中のような量がある。

冷蔵庫もちゃんと機能している。食材は傷んでいないようだ。炊飯器、レンジ、クッキングヒーター、全ての物が機能した。

一週間は余裕で食に悩まなくて済む。

彩奈は卵焼きと簡単なサラダを作り、食べた。ご飯が欲しかったが早く食べたくて、炊いている時間が惜しかった。

お湯を沸かし、お茶を作った。

水道水も出たし、お茶のパックもあった。

米をとき、炊飯器にセットする。五時間後に炊き上がるようにした。いつでも食べられるように。

一息つき終わると廃虚の中を探索した。風呂、トイレ最低限生活に必要な物はあった。

キッチン以外の部屋は家具が置いていなかった。

彩奈は廃虚を出て隣の廃虚に入った。

キッチン、風呂、トイレ、全てあった。キッチン以外の部屋は家具が置いていない、冷蔵庫の中もまるごと一緒だ、違う所が無い。気味が悪い。

その隣もまたその隣も全く同じだった。

初めの廃虚に戻って、炊飯器を見る、後四時間で炊き上がる。一時間がたっていた。

彩奈は風呂にお湯をいれ、満杯になるまで待った。満杯になるとすべてを脱ぎ捨て風呂に飛び込んだ。久しぶりに風呂に入った気がする、時間がわからないからだろうか。

シャンプーと石鹸があつた。リンスがないのが残念だった。風呂は気持ちが良い。

髪を洗い、体を洗い、顔を洗う。換気扇が無いため風呂は湿りきっていた。

さっぱりした気持ちで風呂を上がると、眠たくなった。

ベッドが無いため、床にバスタオルを敷いて寝た。眠りに落ちるのに時間はかからなかった。

彩奈は起きると、炊飯器からご飯をすくい茶碗へと、スクランブルエッグに味噌汁を作った。

ご飯を食べた。テレビ無での一人で食べる食事は寂しく感じた。

食べ終わると食器を流し台に運んだ。

廃虚を出てると相変わらずの空が広がっていた。

少し歩き回り、辺りを観察する。

似たような廃虚ばかりで視覚が狂いそうだ。

ふと、人の気配を感じた。辺りを見渡し、誰かいないか確かめる。

しかし、誰も居ない。人の気配はまだ感じる。

しばらく歩いて近くの廃虚に入った。

出口から外を見渡した。すると人影が見えた気がした。彩奈は廃虚から飛び出し人影が見えた方向に向かい走った。路地に入り、先を進む。人と話したい、その想いが強くなっていた。

ずっと走り続けた。

人の気配が強くなる。路地を抜けるとそこには、空き地のような空間があり人が十人位居た。皆、彩奈を凝視していた。人に出会えた喜びが沸き上がったが直ぐに鎮まった。

異様な雰囲気漂っている。

年老的な男性、若い男性、若い女性、老若男女それぞれだが、皆殺気を放っている。その中で殺気を全く感じない人がいた。小さな女の子だ。少女は地べたに座っている。

少女は黒髪のショートヘア、顔が整っていて、凛々しさを感じる。彩奈はその子に近寄り、声をかけた。

「こんにちは」

すると、殺気が強くなるのを感じた。皆、彩奈を凝視している。

「こんにちは」

少女から返事が返ってきた、それはとても落ち着いた声だった。

「ここでは何が起こってるの？ この世界は何なの？」

この少女が知っていそうにないが聞いてみた。

すると、少女はびっくりしたような顔をした。

「もうじきわかると思うよ」

何か知っていそうな口調だ。

「もうじきって？ 何か知っているの？」

急かすように聞いた。

「来る」

少女はそう呟いた。

「えっ」 異様な雰囲気が強まった気がした。

「諸君、ごきげんよう」

彩奈は後ろを振り返る。すると、さっきまでいなかった大男がいた。ニヤニヤ笑っていて何かを楽しんでいるように見える。

「では、始めるとするか」

大男は言った。何を始めるのだろうか？

「さあ、並びましょう」

少女は彩奈に声をかけ大男の方に向かってている。

「ちょっと待って」

彩奈は少女を呼び止めるが少女は前に進む。

「ねえ、何が始まるの？」

彩奈は少女の真後ろにつき聞く。

「カードを引いて、サーヴァントを選ぶの」

「サーヴァント？」

サーヴァント、聞き覚えが無い。

「サーヴァントって？」

「簡単にいうと相棒よ」相棒、
相棒を選ぶ？

大男は八枚のカードをババ抜きのように手で持っている。

少女が一番初めに引いた。その次が彩奈、次々とカードが引かれていく。一人一枚、最後の一人が引き終わると大男はニヤニヤ笑みを
作った。

「では、九日間生き残ってくださいね」

大男は続けて、

「魔獣を放ちますよ」

と言い、大男は何かを呟き、手を上に上げた。

「今から、ここは何でもありの無法地帯です」

大男はそう告げると消えてしまった。

2XXX年八月二十日、自分の命をかけたゲームが今、幕を開けた

始まり

大男が目の前から霧のような靄になって姿を消した。彩奈は目の前で起きたことが信じられずにいた。この世界では普通の事だろうか？ 呆然としていると、強い殺気を感じた。

「ウオオオオオー」

響き割れそうな叫び。振り返るとそこには今まで見たなかで一番大きい男がいた。身長は二メートルを余裕で越えている。右手に大きい斧、左手には大きいサーベル。もはやそれは人間ではなかった。恐い。その大男が発するまがましい殺気が死を感じさせる。

逃げよう。

しかし、足が動かない。死を目の前にしてなすすべがなかった。

大男は彩奈に歩みよっていく。目の前にもう大男はいた。

「はあっ、ひゅっ」

彩奈の息が荒くなった。

大男は斧を振り上げた。そして、振り下ろした。

雷のような物凄い音がした。

アスファルトの欠片と粉塵が舞う。

大男はアスファルトにのめり込んでいた斧を片手で引っこ抜き辺りを見渡す。仕留め損なった。

粉塵が風に飛ばされるとそこには大きな穴があいているだけで彩奈の姿はなかった。

「ちっ、逃したか」

大男の後ろにいた若い男が呟いた。

赤く染まった髪の毛が印象的な青年だ。

「まあいいか」

青年は口を歪め笑いをこらえているようだ。

「俺のサーヴァントは最強だ。なあ、バーサーカー」

大男は興奮している様子で今にも暴れだしそうだった。

彩奈は今までの出来事を信じられずにいた。

大男が斧を振り下ろしたのに、まだ生きている。

少女が助けてくれたのだ。一瞬で少女は彩奈を抱えて逃げたのだ。今も信じられない速さで少女は走っている。しばらく走り続けた後、少女はスピードを落としていく。

完全に止まると、少女は彩奈を下ろした。

「あつ、ありがとう」

「いいわよ、私はあの外道が嫌いなだけ」

外道とはさっきの男だろうか？

「私は好んで人殺しする奴らがすごく憎いの」

少女の顔は憎しみに満ちていた。

「そうだ、貴女魔術師じゃないでしょ」

魔術師？ 小説や漫画に出てくるやつだろうか？ 彩奈の返事を待たず少女は続けた。

「偶然かしら？ 必然かしら？ 貴女が巻き込まれたのは」少女は何やら考えている。

「貴女は魔術師なの？」

彩奈は聞いてみた。

「ええ、私は魔術師よ」

少女は言った。

「魔術師はあまり正体をあかさないんだけどね本当は」
魔術師、今まで起こったとんでも現象は魔術師によるものだろうか？

「あの大男も魔術師なの？」

彩奈は聞いた。

「違うわ、あれはサーヴァントよ」

聞き覚えのある『サーヴァント』という言葉。

「サーヴァントってあのカード」

「そうよ、サーヴァントはあのカードを媒体に召喚されているの。サーヴァントはこの世界が選んだ、今は亡き戦士や悪党や英雄だね。そして、彼らはこの世界から出たいの。そのために私たちに協力しているのよ」

「カードを媒体に？」「そう、あのカードはサーヴァントをこの世界に呼び寄せるための媒体にすぎないわ。呼び寄せてしまえばカードは用済みよ」

「…」

彩奈は必死に理解しようとするが理解できない。

「サーヴァントはもともと違う世界に集められているのね、それであのカードを使ってこの世界に召喚しているの」

彩奈はなんとなく理解したつまり、カードはサーヴァントのいる世界とこの世界とをつなぐ扉なのだと。さらに、少女は話す。

「サーヴァントは皆がそうではないのだけど、自由になりたいの。

サーヴァントの世界では、サーヴァントは魂だけで肉体がないの」彩奈は半分も理解できていないが相槌をうった。

「そして、この世界では仮の肉体を与えられる。肉体を得ることで自由になる、サーヴァントは主人と契約を交わし、主人を私たちの世界に返すことでようやく、本当の肉体を手に行けるってわけ」

「私たちを元の世界に？ どうしたら戻れるの？」

彩奈は元の世界に戻れることに驚いた。もうこの世界から出られないと思っていたからだ。

「九日間生き残れば良いのよ」

『生き残る』そういえば突然現れた大男も言っていた。それと、『魔獣』を放ったとも。

「生き残って、魔獣から逃げろってことだね。ところで魔獣ってなに？」

「魔獣というのは…、簡単にいうとライオンなどの獣が凶暴化して、さらにとてつもない身体能力をもったようなものかな」

ライオンから九日間逃げ切れそうもないのに、魔獣はさらにとてつ

もない身体能力を持っている。彩奈は力が抜け地べたにへたれ込んだ。死刑宣告されたように感じた。

「でも、貴女が私を助ける時に使った、あの…」

「無理よ、さっきは不意をついたから成功したけど、魔術師やサーヴァント、魔獣には効かないわ」

あの瞬間移動のようなのが効かないと知って彩奈はがっかりした。

「これまでに生き残って、もとの世界に帰れた人はいるの？」

「一人だけ」

『一人だけ』その言葉は彩奈をさらに苦しめた。何人中で一人なのかは聞きたくなかった。途方もない数が返ってきたらと考えると怖くて堪らなかったからだ。

「そこで提案なんだけど、共同戦線を張らない？ 生き残る確率を少しでも上げようと考えたら、力を合わせて戦った方が良いと思うの。一緒に戦わない？」

この状況で仲間ができたことは彩奈にとって心強いことだった。

「ありがとう、一緒にもとの世界に帰ろ」

彩奈が二つ返事で返すと少女は微笑んだ。

「私の名前はね、桐島志穂。よろしくね」

少女は手を前に出し、握手を求めた。

「私は、杉内彩奈」彩奈は志穂の手を優しく握りしめた。

それから彩奈は、このゲームについて詳しいことを志穂から聞いた。このゲームではもとの世界に戻ることができたら、サーヴァントは本当の肉体を手に行き渡ることができ、魔術師たちは自分の願望がひとつ叶う。

自分のサーヴァントは他のサーヴァントの主人を殺すことで強くなる。

ほとんどのサーヴァントは、魔獣より身体能力が低い。（バーサーカーは例外で理性を失っている代わりに魔獣と同等の身体能力を持っている）

魔獣は何体いるかは不明。

サーヴァントのクラスは、セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、アサシン、キャスター、バーサーカーの全部で七つ。

だいたいこの事を聞き終わると日がすっかり沈んでいた。

彩奈と志穂は、廃虚の中に入り夕食を取ることにした。彩奈が料理を作り、志穂は食器を並べた。

四十分ほどで夕食ができた。それを二人で食べる。志穂は上品な食べ方をしていた。喋り方も大人びていた。厳しい教育を受けてきたのだろうか？

「スゴいね、話し方も大人っぽいし、食べ方も上品だし」

志穂は口の中にあるものを飲み込み、

「私の家は由緒正しい、魔術師の血筋なの、それで桐島家の一人として恥ずかしく無いようになって、教育を受けてきたから」と言った。そう言った志穂はどこかほこらしげだった。

夕食を食べ終わると、志穂はサーヴァントの召喚を言い二階の部屋に付いてこいと言った。

志穂はポケットからカードを取り出すと呪文を唱える。それはどこの国の言葉かわからないものだった。

すると、カードが光だし辺りを包み込んだ。

光が消えると、そこには甲冑を着た女の子がいた。その少女は高校に通う彩奈とだいたい同じ歳に見える。少女は茶髪で鼻はすっと高く整っていて、顔立ちは凛々しかった。

「サーヴァント、セイバー召喚に応じ参上した。問おう、貴女が私のマスターか」

甲冑を着た少女は志穂に向かい合い言った。

「ええそうよ」

志穂は言い終わると、彩奈の方を向いた。

「召喚にはいろいろな方法があるの。貴女には感じて召喚する方法が良いかしら」

「感じる？ 何を感じたらいいの？」

「向こう側にいるサーヴァントよ。まあ時間がかかっるでしょうけど、根気よくやると良いわ」

と言っ終わると、光が辺りを包み込んだ。

「うそ、できた」

彩奈は驚いていた。志穂も同じに驚いていた。

「問おう、あんたが俺の主人か」

召喚されたのは、日本刀を二つ携えた少年だった。

暗殺者

少年は、黒髪でスラッと背が高い。

「貴方のクラスは？」

志穂が聞いた。

「アサシン」

少年は答える。志穂はまた何かを考え始めた。

「お前が俺の主人か」

と言って少年は彩奈の顔を見た。そして少年は驚いたような顔をした。

彩奈は訳がわからず、どうしたの？ と尋ねた。

「いや、何でもない」

急に偉そうな態度を改めた。

「それより、お前ら珍しいな共同戦線か？ 魔術師はあまり群れようとしないうとしないだろ」

アサシンは珍しげに彩奈と志穂を見た。

「ええそうよ、私達魔術師はあまり、群れようとしないう。信用できる魔術師なんてほんのわずかししか居ないわ。けど、貴方の主人は魔術師じゃないから、それで共同戦線をはったの」

「本当か、主人よ」

「ええ」

彩奈は短い返事を返した。すると、アサシンは何か考え始めた。

「貴女のクラスは？」

志穂は甲冑を着た少女の方を向き言った。

「私のクラスはセイバーです」

甲冑を着た少女は答えた。

志穂は微笑んだ。

「3大クラスを引くなんて私はついてるわ」

『3大クラス』知らない言葉が出てきた。

「3大クラスって？」

「3大クラスは、セイバー、アーチャー、ランサーの事よ、このクラスは他のサーヴァントと比べて優秀なのよ」

「じゃあアサシンは？」

「アサシンは偵察や潜入ミッションなどを得意にしているわ。だからアサシンを偵察に使い、主に戦いはセイバーがやればいいと思うわ」

「そうなの？」

彩奈はアサシンに訊く。

「まあだいたい合っている。アサシンは戦いはあまり強くない。だが俺は別格だ」

アサシンは志穂を睨み付け言った。

セイバーがアサシンに剣先を向けた。アサシンとセイバーは互いに強烈な殺気を放っている。

「そうかもね、アサシン。貴方のその双剣は概念武装ね」

「そうだ」

そう答えたアサシンは殺気を消していた。セイバーは刃先を下ろす。

「概念武装って？」

「概念武装っていうのは、魔術や呪いなどにより武器に特殊な能力を付加することで、普通の武器ではありえない事をやってのける特殊な武器ね。

たとえば、絶対にどんな攻撃も防げる盾だとか、絶対に何でも切れる矛だとか」どこかで聞いた事のある話だ。

「矛盾」

「そう、でも矛盾は発生しないわ、そういう場合、魔術や呪いによる概念の強い方が勝つもの」

特殊な能力を付加する。魔術師という人達はそんな事もやってのけるのだろうか？ 目の前にいる志穂が恐ろしく思えた。

鈍色の空は相変わらずだ。彩奈と志穂はアサシンとセイバーに、真名を聞こうとしたが、アサシンは答えずに何処かへ行ってしまった。

「私の名は、クレオです」クレオ、どこかで聞いたような名だ

「2053年に起きた革命の中心人物ですね」

習ったことがある。大陸内の紛争を終焉にした、革命の事だ。

「凄い、本人？」

「はい」

セイバーはうなずいた。

「アサシンは誰なんだろう？」

彩奈は興味を覚えた。

アサシンは真名を答えずに何処かへ行った。真名を知られたくなかったのだろうか。

それとも、他に理由があるのだろうか――

アサシンが私に話してくれるのを待とう。彩奈にはアサシンがどこかに深い傷を負っているように見える。

心を開いて打ち解けたらな。

彩奈はいつの間にかアサシンを知りたくなっていた。

それは、好意ではなく他の何か。その何かが彩奈をに興味をそそっている。

彩奈は空を見上げた。相変わらぬ鈍色が一面を覆っていた。

彩奈には空が悲しみに満ちているように見えた。

暗殺者（後書き）

—私の隣を彼が歩いている。

彼は何か話しているけど、頭に入ってこない、
最近の私はおかしい。心から何かがつっぱりと抜けたような感じが
する。

何故だろう？

隣の彼はまだ何か話している。

辛いのだろうか？ 悲しいのだろうか？ 嬉しいのだろうか？ 楽
しいのだろうか？ わからない。

隣の彼はまだ何か話している。

私は隣の彼をまじまじと見つめる。

隣の彼は話すのを止めた。

視線があった。

最近の彼もおかしい。

何でだろう？

最近何かあった？

私は空を見上げた。相変わらずの鈍色の空。

ため息をつきたくなる。

彼は私を見つめている。

鋭い。殺気を放っているような、優しさを含んでいるような。

魔獣の気配がする。

それを彼に伝えた。

さあ、私の出番だ。

私は彼を生かす為に存在する――

準備（前書き）

第一章

準備

ゲーム開始から十六時間が経過、未だに魔獣、その他のサーヴァント、魔術師に遭遇はなし。

志穂は腕時計を見て経過時間を確認していた。

この世界の空はいつでも鈍色、朝、昼、夜がない。

十六時間廃虚の中で過ごした。志穂はその十六時間の間で、結界やトラップを仕掛けていた。魔術師や魔獣、サーヴァントに気付かれないよう外界と結界内を遮断するものだ。だが、いつかは気付かれる。時間を遅らせるだけに過ぎない。

彩奈は料理をしていた。魔術を全く使えない彩奈は家事をするほかなかった。

セイバーは志穂の隣を付いて歩いている。

アサシンはあれ以来帰ってきていない。彩奈はアサシンが居ない事に少し不安を感じた。今、ここが魔獣や魔術師に発見され、攻められたら志穂とセイバーだけで足りるだろうか？

彩奈は戦力にならない自分を少し恨んだ。守られっぱなしは嫌だ。志穂が助けてくれなかったら私は死んでいた。さらに、志穂は今も私を助けてくれている。志穂と共同戦線をはっていなかったのなら、私はどうしようもなく今頃、魔獣や他の魔術師に殺されていたかもしれない。

彩奈は志穂に恩返しをしたかったが、魔術が使えないため今はこうして料理などの家事を頑張ろうと思った。彩奈は肉じゃがを作った一応、晩御飯という事になっている。

彩奈はキッチンのテーブルに四人分の食器を並べた。

そして、三人分の肉じゃがとご飯をそれぞれの食器に入れた。アサシンの肉じゃがは帰って来たら温め直して出してあげよう。

彩奈は残りの肉じゃがをいつでも温められるよう、鍋に残したまま蓋を閉めた。

彩奈は志穂とセイバーを呼び、志穂とセイバーはキッチンに入った。「ありがとう、いただきます」志穂は胸の前で手を合わせ言った。セイバーもそれにならった。

食卓に会話は無かった。彩奈は非日常の出来事を体験し疲れきっていた、志穂は魔力を結界作りに費やし疲れていた。

セイバーは疲れていなかったが、自ら話題を出す事は無かった。

食事が終わると食器を流し台に集め彩奈が洗った。

志穂は欠伸を噛み殺し、

「今日はもう寝ましょう。セイバーは見張りをお願い」と言いつた。

「はい、わかりました」

セイバーの返事を聞くと志穂はキッチンを出ていった。

「彩奈さん、私は見張りに行ってきます。…またあした」

「またあした」

彩奈の返事を聞くとセイバーもキッチンを出ていった。

彩奈は一人キッチンに残った。

セイバーは廃虚の屋上で見張りをしていた。

すると、志穂のはった結界をサーヴァントが通過するのを感じた。

セイバーは剣を鞘から抜いた。

結界を通過したはずなのに気配が感じられない。

アサシンだ。

アサシンが帰って来たのだろう。

だが、本当にアサシンだろうか？ セイバーは剣を構えた。

「剣を収めろ、俺だ」

背後から声がした。

セイバーは後ろ振り向く、すると日本刀の刃先が目の前にあった。

「俺が敵だったらお前、死んでるぞ」アサシンは不適な笑みを浮かべ言った。

「今、殺してやろうか」

セイバーはアサシンの日本刀を自分の剣で真っ二つに切り裂いた。

「冗談、冗談」

アサシンは日本刀の刃先と杖の方を拾い上げた。

「それより、なんだこの結界は、ここを探し出すのに凄く手間がかかったぞ」

「お前、アサシンだろ？ 自らの主人の居場所もわからなかったのか？ それでもアサシンか？」

セイバーは挑発的に言った。

「セイバー」

「なんだ」

アサシンはセイバーに近づいていく。セイバーは剣を構えた。

「腹減った」

アサシンの放った一言にセイバーは脱力した。

「お前の主人が、お前分のご飯も作っていた。それを食べろ」

アサシンはサンキューと言いセイバーに背を向ける。

「礼ならお前の主人に言え」

アサシンはセイバーから離れ階段を下った。

アサシンがキッチンに入ると彩奈がイスの上で寝ていた。食卓の上で顔を埋めていた。

「風邪引くぞ」

アサシンは何かを彩奈に被せてやろうと思ったが、彩奈は起きてしまった。

「おかえり、ご飯作ってあるから温めるね」

彩奈はそう言うときき上がり、温め直した。温め直している間、二人に会話は無かった。

五分位温めると彩奈は食器に肉じゃがを入れた。アサシンはそれを黙って食べた。彩奈はご飯も食器に盛り、テーブルに置いた。それをアサシンは食べた。

アサシンは階段で屋上まで上がった。

セイバーが座っていた。背中をフェンスにあずけていた。

「何しにきた」

セイバーは聞く。

「見張りを代わってやろうと思ってな、一応アサシンだし偵察や見張りはセイバーより得意だよ」

しばらく沈黙が続いた。

「そうか、では寝させてもらおう」

セイバーは目を閉じた。

「お前そこで寝るのか？」

「勝手だろ」セイバーは目を閉じたまま言った。「それに、私はお前を信用してない」

「それなら、寝るな」アサシンはセイバーの隣に座り言った。

「冗談だ。もし裏切るような奴ならさっき私を殺していただろ」

セイバーは言った。

そして、しばらくするとセイバーの吐息が聞こえてきた。

アサシンはセイバーの寝顔を眺めた。

アサシンは気付かれないようそっと立ち上がり屋上を出ていった。数時間後セイバーは起きたが隣にアサシンが居ない事に気付いた。慌てて立ち上がり辺りを見渡す。

すると、離れた位置にアサシンはいた。

セイバーはほっとした。

再び座ると自分に毛布が掛けられていた事に気付いた。

セイバーは毛布を拾い上げ、毛布で自分を包み込んだ。

志穂は起きてると、セイバーを探した。屋上で気配を感じ、屋上に向かう。階段を上がりドアを開くと、アサシンとセイバーがいた。

セイバーは志穂を感じ立ち上がった。

「アサシン、貴方帰っていたのね」

「あんたの結界を通過したんだ。気付かなかったのか？」

アサシンは座ったまま答えた。

「気付いていたわよ、私は嫌味を言ったの」

志穂はセイバーの方を向き続けて言った。「ご飯が出来たそうよ」

「はい、すぐに行きます」

志穂は階段を降りていった。

「さあ、行こう」

セイバーはアサシンに言った。

「ああ」

アサシンは立ち上がり階段に向かう。

セイバーは先に階段を降りていった。

アサシンが階段を降りるとすでに全員そろっていた。

スープに目玉焼き、朝飯のようだ。

アサシンが食卓につくと皆が食べ始めた。食卓は広く間隔が十分過ぎる程とれるはずだが、彩奈はアサシンの隣にぴったりついた。

「見張りお疲れさま」

彩奈は微笑み言った。

アサシンはぼかんとしていた。

「そんなたいそうな事はしてない」

「謙遜、謙遜」

彩奈はさらに微笑んだ。

アサシンは調子が狂い、それ以上喋らなかった。

食事が終わると、彩奈は食器洗い、志穂はセイバーを連れて廃虚内に魔術的なトラップを仕掛け、アサシンは見張りをした。

彩奈は食器洗いが終わるとアサシンの元へ向かった。

アサシンは屋上で寝ていた。

「見張り番が寝てていいの？」

彩奈の声で目を開けた。

「俺は、寝てても気配を感じることが出来る」

アサシンは開けた目を閉じて言った。

「ふーん、そうなんだ」

「そうだ」

彩奈はアサシンの隣に座った。

「少し話していい」

アサシンはその問いに答えなかった。

「魔術師は、サーヴァントの戦闘時に回復魔術などで援助するんだって。志穂が言ってた。私は魔術師じゃないからね、何も貴方に援助してあげられない」

「知ってる」

少し沈黙が訪れた。

「だからね、私少しでも魔術が使えるように、志穂に頼んで魔術を教えてもらおうかなって」

また少しの沈黙。

「俺が教えてやろうか、俺は元魔術師だし」

「えっ、そうなの」

「ああ、回復魔術位なら教えられるよ」

彩奈は『ありがとう』と返事をした。

「まずは、魔術回路を開かないとな」

「魔術回路？」

「魔術回路っていうのは魔術を使うのに必要な物だ」

アサシンは右腕の袖を腕捲りをした。

「これだよ」

アサシンの腕にはいくつもの線が入っていた。

「凄い、アサシンも魔術使えるんだね」

アサシンは右腕の捲りを直し、

「いや、俺の魔術回路は切れかかっているから、あまり使えない」

魔術回路が切れる？

「魔術回路って切れるの？」

「ああ、容量オーバーの魔術を行使し続けると切れる。俺の器より大きい魔術を使ってきたから、今、切れかかっている。

この世界で実体化するために得たこの仮の体でも魔術回路が切れかかっている」

「そうなんだ」

彩奈は自分の腕を見た。

「魔術回路を作るのに方法は沢山ある、お前の場合は体内の魔力を感じろ」

「うん」

彩奈は自分の中にある魔力をイメージしてみた。何分かたっても魔術回路はできなかった。

「出来ないよ」

「そんなものだ。一発ではできない、根気よく続けることだな」
アサシンはそう言うときき上がり、

「あと少しで魔獣が来るぞ」

そう言い残し、屋上を後にした。

彩奈は屋上から辺りを見渡した。だが、何も怪しいものは無かった。屋上に静けさが満ちていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8913y/>

Fate/resistance

2011年12月17日17時47分発行